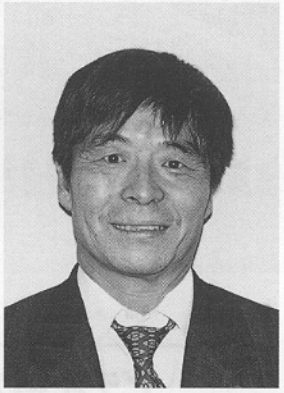
大阪府立中央図書館だより

# はるみや

1998.新春号 No.4

## 我が街の図書館から想う

副館長　土井忠夫



図書館勤務を命ぜられるよりも、ずっと前から街の図書館の愛用者だった。図書館の運営にあたって利用者の目を忘れてはならないと思っている。

私の街の図書館は20年程前に、それまで、ある役所だった建物を改装して出発したと記憶している。

ごく小規模で、閲覧席も10席程度だ。利用者は主婦や老人が多いように感じられる。近くにスーパーなどもあって買物のついでに立ち寄る。府立図書館で借りようとすると、予約の順番が回ってくるまで半年かかるベストセラーでも、この図書館でなら、それほど待たずに借りることができ、便利だ。でも、開館当初から愛用していたわけではない。

サラリーマンが図書館へ行けるのは休日に限られる。休日は勤務によって様々である。以前はよく私の休日と図書館の閉館日が重なって利用できなかった。それが今では、月末と年末年始以外は開館しているので安心して行けるようになったのだ。来館者を見ると私と同様で、勉強、調査、研究ではなく、何か面白い読み物はないか、旅行や趣味のガイドブックはないかと、ブラウジングしている人がほとんどである。

プライバシーが守られ、無料で、静かで、1人だけで利用できる図書館は、特別の目的なしに立ち寄っても新たな本との出会いが期待できて楽しいものだ。

税金も、図書館を利用することでかなり還元できる。

今後、私のような図書館利用者は増え続けるだろう。その人達の要求の第1は開館日を増やせ、である。これに対応していくのは大変だ。増員できればよいのだが今の時代、増員は難しい。おもいきった事務の整理、簡素化が必要となってくる。

次に、街の図書館から、自転車で20分程行くと、市の中央図書館に着く。ここは15年程前に図書館として新たに建設された施設で、広くて、資料も豊富であり、閲覧席も多い。本を借りるだけでなく、自習もでき、種々のしらべものもできる。いつも静かな街の図書館と比べると活気がある。学生が勉強に来れるからだろう。

ここでは、全市民からの様々な資料要求に応えていかねばならない。図書館利用者の増加から、レファレンスの要求は多様化し専門化していく、このため資料を入手するルート、近隣の市や府との協力体制の整備が大きな課題となってくると思われる。

しかし、それでも「市の図書館には昔の資料がないので調べものをするには不便、やっぱり府立へ通わねばならない。」という声がある。(大学図書館は自由には利用できないようだ。)専門的に勉強する人には、過去の研究資料や統計が必需品であるが、歴史の浅い市立図書館が昔の資料を収集、保存しておくのは困難である。もっとも、請求すると府立や近隣の図書館に問い合わせて取り寄せてくれる。しかし時間がかかるのはやむを得ない。

このように考えてくると、利用者から見て、近くにある街の図書館は、いつでも開いていて、新しい小説・読物類を借りるのが便利なところ。中央図書館は、勉強もできるところ、資料を集めてもらえるところ。府立図書館は、調査・研究もできるところ、となる。

もちろん、これ以外に図書館の立地場所や時代によって様々な機能が要求されてくる。しかし府立図書館にとっては、古くからの資料の収集と整理、保存が重要だ。